

「生きものの循環論」による三つの主体 —環境系から農家生活リズム論への展開

徳 永 光 俊

序章 三つの主体—環境系論の立面図

前稿では、高橋正郎の三つの主体—環境系論を軸に農法論から農業経営史への展開を述べた。そして、三つの主体—環境系論の関係を平面図で示し、歴史的な展開を表現した。本稿では、それを一九頁の第一図のように立面図で表現してみた。横の水平方向の矢印 $\Rightarrow$ は、それぞれの主体—環境系の相互扶助関係を表し、縦の垂直方向の矢印 $\Leftrightarrow$ は、三つの主体—環境系の相互関係により創発する状況を表している。三つの経営主体は、上から「経営主体」、「生活主体」、「労働主体」と区別している。そして全体として「まわしくまわす $\Leftrightarrow$ まわされる $\succ$ 」の循環構造であることを表現している。この立面図により、大変見晴らしがよくなったように思う。

さらに第二図は、経営主体がたとえば在地の村で複数存在する場合をイメージしたものである。右に二つしか書いていないが、実際には多数多様に存在する。そして各主体—環境系は点線で繋げているように相互に関係し合っている。さらに左には、とくに一九六〇年代以降、農外要因が農業・農村内の各主体—環境系とどう関係しあっているかを、点線で示した。とくに農外就業での兼業化・脱農化と都市化・近代化の浸透が大きな影響を与えていることを示している。本稿ではこの立面図を念頭におきながら展開していく。

第一章 農家・農村を訪ね歩いて

第一節 いくつかの主張

前稿で紹介した高橋正郎の『日本農業における企業者活動』（二〇一四 農林統計出版）の主張は、第一図では一番上の経営主体—市場環境を重視したものと言えよう。高橋は金沢夏樹の農業経営学を批判していたが、同様に金沢批判をしているのが長尾正克である。長年にわたり北海道立農業試験場で規模拡大、機械化による企業的な酪農経営を目指す方向をすすめてきたが、はたしてこれでいいのかと疑問を持ち始め、中標津町の三友盛行の『マイペース酪農—風土に生かされた適正規模の実現—』（二〇〇〇 農文協）に出会い衝撃を受ける。そして小規模酪農経営による生態的家族農業経営論を展開する。これは一番下の労働主体—技術環境を重視したものである。

私は長尾の主張に賛成する部分はあるが、その理論的展開に関してはいくつか疑問を持

つ。長尾正克『ジャスト・プロポーション—新しい農業経営論の構築に向けて—』（二〇一八 筑波書房）での主張を検討してみよう。大規模酪農政策の理論的根拠となったのは金沢夏樹らの生産構造論的農業経営学であるとする。長尾は「金沢夏樹氏の農業経営理論は、小農（労働型家族経営）→企業の家族経営（資本型家族経営）→企業経営という発展段階があり、労働型家族経営を資本型家族経営に誘導することを目的としている」（前掲書二五頁）、「金沢氏が、小農経営論を否定するあまり、資本主義経済が深化するに従って家族農業経営であっても企業的に行動するとして、企業の社会的側面としてエートスだけを問題にしたことは納得できない」（前掲書四七頁）、と批判する。まさに金沢はそこで苦勞し、「私的側面と社会的側面」の「二重構造論的農業経営学」を展開したのではなかろうか。金沢の下で学んで批判的に乗り越えようとする高橋正郎は、「数多ある金沢著作の中に『農業経営の企業化』、『企業の農業経営』と題する論文はほとんどない」（『日本農業における企業者活動』二六一頁 二〇一四 東大出版会）、と言い切っている。

長尾は金沢がこのような過ちに陥ったのは、「農村を行脚して農家の声を聴く耳をもたなかった」（前掲書二六頁）からではないかと推測している。これは金沢の『稲作の経済構造』（一九五四 東大出版会）から『農業と農学の間』（二〇〇二 養賢堂）までの五〇年近くの単著や編著を読めば、的外れであることは明らかである。長尾は金沢の生産構造論的農業経営学を金沢夏樹編『農業経営学講座Ⅰ 農業経営学の体系』（一九七八 地球社）のみで論評している。やはり金沢の全著作、さらには没後一周忌に出された『金沢農業経営学とその展開』（二〇一一 龍溪書舎）を検討してから批判すべきである。

長尾は家族経営には二つあり、企業的に行動しようとする企業的家族経営、これが北海道の酪農では慣行農業経営の大部分であるとみる。もう一つは、経営と家計が峻別されていない生業的家族経営である。そして守田志郎の『農法』（一九七二 農文協）のみを紹介して、生活と生産が一体化した家族経営の主張に全面的に賛成している（長尾前掲書三七頁）。ただし二つの家族経営に共通する経営目的に関しては、「二元論的把握」が必要であるとする。一つは自然に寄り添う、自然環境を守ること。もう一つは市場経済に対応する経済性の追求である。長尾は、自然に順応するという理念を基軸に据え、その制約を踏まえて経済性を考慮することが、農業経営の本来の目的であり、農の原点であるとする（前掲書一五一頁）。三友由美子夫人はチーズ生産に取り組み成功させている。三友夫妻は二〇一五年から酪農適塾を始めて、後継者の育成に努めている。二〇一六年一二月塾頭であった吉塚夫妻に事業継承している。

長尾は三友夫妻の「マイペース酪農」こそが、土一草一牛の生命循環による自然エネルギーの効率的利用によって、化石エネルギーを大幅に節約し、結果として経営費が下がり、環境にも負荷を与えず、経済的に家族経営を成立させている。ただし近代技術の一部を積極的に取り入れるという点も忘れてはならないとする（前掲書一五二頁）。なお、この土一草一牛の生命循環に関しては、佐々木章晴『これからの酪農経営と草地管理—土・草・牛の健康な循環でムリ・ムダをなくす—』（二〇一四 農文協）、同『草地と語る＜マイペース酪農＞ことはじめ』（二〇一七 寿郎社）が詳しい。「ジャスト・プロポーション」

とは適正比例であり、横井時敬の「合関率」であるとする。横井の合関率についてその後の農業経営学での研究は、長尾が批判する金沢夏樹の紹介がある（前掲書『農業経営学の体系』二六八～二七〇頁）。生態学的家族農業経営論とはどのようなものか。

楠本雅弘は、『地域の多様な条件を生かす集落営農』（二〇〇六 農文協）を主張する。さらには『進化する集落営農』（二〇一〇 農文協）で、集落営農は地域住民による「社会的協同経営体」であり、農協が果たすべき役割を強調する。これは真ん中の生活主体—文化環境を重視したものといえよう。

楠本は二二年間にわたり農林漁業金融公庫に勤め、現場の農家・農村を調査し交流してきた。一九八七年から山形大学に移り、二〇〇七年に退職する。その後自ら研究所を主宰して、複式簿記と家族経営協定を活用した経営改善や負債整理について各誌に長期連載して農業経営者に助言し、各地の農業改良普及員と連携してワークショップ方式で指導して来た。全国の集落を歴訪して、住民たちと「二階建て方式の集落営農」によって地域を再生する実践活動に従事している（『進化する集落営農』二八六頁）。

「二階建て方式地域営農システム」とは、一階部分は農家・農地・水・地域資源の土台部分の諸関係をまとめて調整する組織である。従来の集落の諸機能が集落営農組合などの組織で活かされ、比較的高齢の社会経験豊かな調整型の人材によって地域がまとめられている。二階部分は、担い手やオペレーターなどが中心となって組織した農業生産の実働組織であり、農産加工や販売活動も展開する。経営者型のマネジメント力のある実務型人材が中心となるが、特定農業法人や個別営農、高齢者や女性の活動など多様な担い手からなる（『地域の多様な条件を生かす集落営農』一三三～四頁）。地域の条件に応じて北陸平野タイプ、中国山地タイプ、東北タイプなど様々な集落営農がありえる。

そして楠本は、集落営農が単なる地域的営農組織の段階から、それを土台にしながら地域住民の暮らしを支え、地域を再生する「地域住民による社会的協同経営体」に進化しつつあるとする。それは利潤追求を目的とする私企業よりも、経営的優位性のある持続的な公益的経営システムである。これを歴史的に見れば、明治期の農家小組合、戦前の農事実行組合の協同の精神を一〇〇年後まで受け継いだものである。楠本自身の農業史研究にもとづいている（楠本編著『農山漁村経済更生運動と小平権一』一九八三 不二出版など）。また、楠本は後述する中島紀一とともに中国の有機農業の村の様子をリポートしている（『ともに豊かになる有機農業の村：中国江南・戴庄村の実践』二〇一八 農文協）。

第二節 農家の永続

以上のように、三つの主体—環境系は相互に関係し合っているが、どの主体を軸にして考えるかで、いくつかの考え方があがる。私は地域の条件や時代状況に応じて、どれが一番適合的であるかは変わっていくものだと考える。三つの主体—環境系のうち、どれが大きな割合を占めるかくらいであろう。在地＝場における各主体の相互関係の歴史的展開は、次のようなものである。

	大多数の家族経営	少数の革新・普及者
江戸～明治大正		老農
東畑精一(1936)	単なる業主	(×企業者)
三沢嶽郎(1950)	自給・安全を選ぶ 予想(長期・中期・短期)と選好(投機・安定)	
渡辺兵力(1952)	静態的・慣行的(先駆的・追従的) 慣行的経営集団	動態的・発展的(単独・集団) 組織的経営集団
吉田寛一(1961)	家族経営	(有畜複合経営)
沢村東平(1967)	家族農場経営	
高橋正郎(1968)		企業の農業組織＝中間組織体
甲田 斉(1980)		先導的農業者
八木俊輔(1991)	安定志向型 バランス型	変革志向型
大泉一貫(1993)	客車農家	機関車経営
吉田寛一(1995)	家族経営(農民的複合経営)	(企業の畜産経営)
大泉一貫(2004)	国家依存型農家 集落依存型農家	自分に尊厳をおく農民
楠本雅弘(2006)	集落営農	
木村伸男(2008)	副業的家族農業経営 生業的・企業の家族農業経営	企業の農業経営
高橋正郎(2014)		企業の農業生産法人
小田滋晃ら(2013)		農企業
南石晃明ら(2016)		スマート農業・農業法人
岩元 泉(2015)	家族農業経営(生活農業)	
柳村俊介(2018)	家族的・地域的要素 併存	企業の要素
長尾正克(2018)	慣行的な企業の家族農業経営	生態的家族農業経営

以上は次の文献による。東畑精一『日本農業の展開過程』(一九三六 岩波書店), 三沢嶽郎「農業経営者に於ける予想と選好」『農業経済研究』第二一卷四号 一九五〇), 渡辺兵力「経営変動における経営者機能」『日本農業研究所報告』第三号 一九五二), 吉田寛一『家族経営における生産力』所収の一九六一年の同名論文 一九八一 農文協), 沢村東平『農場経営学総論』(一九六七 東京農業大学), 高橋正郎「農業経営研究方法に関する一省察」(『農業経済研究』第三九巻四号 一九六八), 甲田斉『地域農業と先導的農業者』(一九八〇 明文書房), 八木俊輔「農業経営の環境対応に関する研究」『農業経営研究』第二九巻二号 一九九一), 大泉一貫『一点突破で元気農業』(一九九三 家の光協会), 吉田寛一『現代家族経営論』(一九九五 農文協), 大泉一貫『個の時代のむらと農』(二〇〇四 農林統計協会), 楠本雅弘『地域の多様な条件を生かす集落営農』(二〇〇六 農文協), 木村伸男『現代農業のマネジメント』(二〇〇八 日本経済評論社), 高橋正郎『日本農業における企業者活動』(二〇一四 農林統計出版), 小田滋晃ら『動きはじめた「農企業」』(二〇一三 昭和堂), 南石晃明ら『T P P時代の稲作経営革新とスマート農業』(二〇一六 養賢堂), 岩元泉『現代日本家族農業経営論』(二〇一五 農林統計出版), 柳村俊介他編『家族農業経営の変容と展望』(二〇一八 農林統計出版), 長尾正克『ジャスト・プロポジション』(二〇一八 筑波書房)

このように数多くの主張がなされてきた。それぞれの時期に、研究者なりにベストな農家像を提案してきたといえよう。それらの中で八木俊輔の主張を紹介しておきたい。八木は「農業経営の環境適応」に関してその後の論文で、サイバネティクスの原理、「自己組織性」や「ゆらぎ」、「散逸構造」、「ホロン」などの概念による「生命モデル」からのアプローチの必要性を説いている。「経営体を機械モデルではなくて生命モデルないし進化論モデルでとらえ直すことで新たな地平が開けて来るであろう。一般経営学の分野では生物学、化学、物理学等の最新の研究業績の援用による学際的な企業の環境適応戦略の研究蓄積があるが、農業経営学もこうした学際的研究を通じて学問として弁証法的に進化を遂げ止揚重ねていくことでより深化していくであろう」（「農業経営管理研究の展開とその課題（二）」『農業および園芸』第七二巻二号 一九九五），と指摘する。全く賛成である。農学の自然科学研究分野では顕著に進んでいるが、社会科学研究分野の農業経営学では遅れているのではないか。それから二五年、どこまで進んだか。八木自身はその後一般経営学へと進み、『現代企業と持続可能なマネジメント—環境経営とCSRの統合理論の構築—』（二〇一一 ミネルヴァ書房）などを著している。

ここで別の視角から考えてみよう。一〇世代三〇〇年間にわたり永続する農家の特徴をまとめた研究がある。戦時中の農村更生運動の中で中堅農民の訓練を、茨城県内原で一九四〇～四四年度まで五回にわたって行い、毎回約一万五千人ほどが参加した。東亜農業研究所は其中で永続する農家の特徴を検討するために、およそ一〇代以上にわたって永続している農家からの聞き取り調査を行った。一九四三・四四年に全国一九県から一四三名が座談会形式で行った（東亜農業研究所『永続農家に関する研究』一九四三 東農研参考資料経第四号，同第二輯 一九四四 東農研資料第三号，藤井米三が予備的に一九四三年に行った一〇名での座談会の記録は、「農家の永続に関する研究」『村』一九四三年四・五月号 農村更生協会）。

その後、東亜農業研究所の継承組織である日本農業研究所は、一九九三年に五〇年後にどのように変化したのか追跡調査を行った。戦時中の調査農家一四三戸のうち、一三〇戸が確認でき、そのうち一〇七戸からアンケートを回収することができた。さらにそのうちの一三県三三戸に関しては直接現地に赴いて聞き取り調査を行った。日本農研の赤嶋昌夫が全体をコーディネートし、戦時中に実際に座談会に加わって調査をした大内力、西村甲一も参加し、その他に川本彰と梶井功が行った（日本農業研究所編『農家永続の研究』一九九四 農文協）。実に貴重な記録、研究である。

赤嶋昌夫のまとめによれば、調査農家は八五％の九九戸が存続しており、同期間の都府県農家全体の存続率は六四％なので二〇％ほど高くなっている。赤嶋がまとめた一九四三・四四年調査の共通点は、農地・山林をもつ中規模農家。跡取り教育をして先祖祭祀をきちんとする。嫁の選択は釣り合いを考えるが嫁の家庭内の地位は低い。集落の世話役や一族のまとめ役。敬神崇祖で高齢者を大事にして年中行事が行なわれるなどであった。

五〇年後の調査での共通点は、立地は中山間地域が多い。多世代同居の直系拡大家族が

中心で、西日本では世代間で住み分けているのが多い。農家経済は農業収入、兼業収入、年金収入と多元化しており、財布はルースリーな個人化が進んでいる。女性、嫁の地位はすっかり様変わりしている。家産意識は根強いものがまだある。

兼業化が進行しているが、五〇年前と同じで一〜二町の中規模層がハードコアとして存在している。有畜複合経営は退潮しているが、自家菜園はしっかりやっている。跡継ぎに関しては、ほとんど確保できているが、農離れは進行している。むらの世話役、一族のまとめ役、地域リーダーとしてこれまでは頑張ってきたが、今後は人並みで行きたいと消極的になっている。固有文化の担い手として寺社総代や村祭りの世話人などを務めてきており、強い責任感を持っている、とまとめている。

農家もまた「生きもの」である。家の再生産、永続を願うのは当たり前である。そのため条件は五〇年たった一九九〇年代においても、兼業化や外部条件の変化によって変わる部分もあるが、核心的な部分がさほど変わっていないことは興味深い。つまり、農家が永続するのは三つの主体—環境系を超えた別の論理が働いているのではないか。

この調査のまとめ役であった赤嶋昌夫は、永続農家の立地条件に関し、興味深いことを述べている。それは日本最古の農書である『清良記巻七 親民鑑月集』（一六七五〜七九）の書かれている「上農の構え」が多いというのである。なだらかな里山の麓にあり、屋敷脇の川も大河ではなく小川である。耕地は田ばかりでもなく畑ばかりでもない。つまり純然たる山村でも平地農村でもないというのである（前掲書三〇〜三一頁、『日本農書全集』第一〇巻一〇頁）。このような見方で評価するとは、正直驚いた。この永続農家の研究に関しては、「永続農家の家訓」（その一・二）としてまとめている（『村づくり夜話』六三〜六八頁 一九九一 全国農業構造改善協会）。さらには「今日の老舗の家訓」との比較も行っている（同書六〇〜六二頁）。私は前稿で経営史研究の商工業の家訓との比較研究の必要性を述べたが、赤嶋はすでに承知しており、赤嶋の見識に敬服する。なおこの本の表紙カバーは、加賀・土屋又三郎の『農業図絵』（一七一七）の田の土作りをする仕事の絵が使われている（『日本農書全集』第二六巻三四・三五頁）。その意図として、「目先の利益を追うことなく未来のために基を培う土づくりは、農の心を象徴する。村づくりの心にも通ずるものがある」（『村づくり夜話』二七〇頁）、と述べている。

そこで赤嶋の単著を少しばかり紹介しよう。『老農は死なず』（一九七八 全国農業改良普及協会）では、明治から昭和戦前期までの三五人の老農を紹介しながら、彼らのメンタリティにより三タイプに分けている。勤儉力行のモウレツ人間である精農型。根っからの百姓ではないが、何らかの機縁で農業に首を突っ込みその道で名をなした在村インテリ型老農。稲作を中心とする伝統農業の分野では精農型の役割が大きく、新しいハイカラ農業の分野ではインテリ型老農が中核的な推進力となった。三番目は、先祖代々名主や庄屋を務めたり古くからの自作地主でその地方の名望家で、土にまみれた農事改良の実践リーダーであった豪農型老農である。彼らはたんなる農事改良にとどまらず、幅広い村づくり運動のリーダーでもあった、前二者の個別の技術革新は、この第三のむらのまとめ役のす

ぐれた判断力と指導力によって定着していった（前掲書二一三～六頁），とまとめている。最後に、「いまや時代は、新たなる現代の老農たちがフェニックスのように各地に再登場することを待望している，といえましょう。老農は死なず。いや死んではならないと思うのです」（前掲書二二七頁），と結んでいる。

一九九一年の『村づくり夜話』では、赤嶋の蘊蓄が囲炉裏端の夜話風に語られる。そして最後に、「農の本質に根ざす農村固有文化とくに精神文化を脈々と伝承し続けることは、農の営みの永続性不可欠の内面的条件をなす。高度成長いらい，その大切な精神文化伝承の装置がこわれかかっている。そのことは，こんにちの農の衰退と無縁ではあるまい。失われたイロリ端の夜話を，現代の条件にマッチした形でよみがえらせる工夫があってほしい」（同書二六九頁），と結ぶ。

一九九五年の『日本の農村—逆境に処する道—』（創森社）は，自身の農村調査五〇年をふり返って、『農村と都市を結ぶ』誌を中心に，一九八〇年代以降に全国各地の農村を回った記録一七点である。赤嶋は一九四三年から七六年まで約三〇年間にわたり農林省でお役所の調査マンとして全国を歩いた。七六年から九五年までの約二〇年間は日本農業研究所で自主独立の調査マンとして全国を歩いた。最後に農村調査五〇年を総括して，この記録は逆境に処して懸命に生きる「本来あるべき農業」を追求している現代の常民の姿である。それぞれの土地柄の風土に根ざす「本来あるべき農業」の本質を大切に守りながら，一步前に出た創意工夫がそれぞれに凝らされている。そのような創意工夫の多くが，志を同じくするグループの活動のなかから生まれ育っているのも印象深い。今こそ「本来あるべき農業」の営みに根ざす暮らしの立てかた，そこでの文化や価値観や人間連帯のありかたなどの総体が問われている。現代日本はそれをほとんど見失っている感が深い，それなくしては地球規模での環境問題や食糧危機はとうてい乗り切れない。逆境に処する「本来あるべき農業」の永続の工夫，それを生んだ風土と人間像の諸相を，本書から汲み取ってほしい（同書二六八～二七〇頁），と述べる。「本来あるべき農業」とは何か。

以上は赤嶋昌夫による一九四〇年代から九〇年代の全国の農村を調査した記録であるが，読んでいともうひと昔前に農山漁村を歩き回った宮本常一の言葉が浮かんでくる。これまでも何度も引用したが，「そこにある生活一つ一つは西洋からきた学問や思想の影響をうけず，また武家的な儒教道徳のにおいのすくない，さらにそれ以前の考え方によってたてられたもののようであった。この人たちの生活に秩序をあたえているものは，村の中の，また家の中の人と人との結びつきを大切にすることであり，目に見えぬ神を裏切らぬことであった」（『忘れられた日本人』岩波文庫版二八九頁）。

「学者たちは階層分化をやかましくいう。それも事実であろう。しかし一方では平均運動もおこっている。全国をあるいてみての感想では地域的に階層分化と同じくらいに比重をしめていると思われるが，この方は問題にしようとする人がいない。実はこの事実のなかにあたらしい芽があるのではないのだろうか。古い地主の生活をもみることもたいせつであるとともに，そういう財産平均化の姿もみたい」（同書二九九頁）。「ならし」である。

「世の人々は農民を固陋といい、頑迷というけれども、……今のような生産能力と社会制度では、今のように生きてゆくことが一ぱん安全であり安定している」（『庶民の発見』講談社学術文庫二一頁）。「文字に縁のうすい人たちは、自分をまもり、自分のしなければ事は誠実にはたし、また隣人を愛し、どこか底ぬけの明るいところを持って」いる（前掲書『忘れられた日本人』二七〇頁）。

「民間のすぐれた伝承者が文字をもってくと、……自分たちの生活をよりよくしようとする努力が、人一倍つよくなるのが共通した現象であり、その中には農民としての素朴でエネルギーな明るさが生きている。そうしてこういう人たちを中軸にして戦争以前の村は前進していったのである」（同書三〇三頁）。「村全体を同じ高さにおしあげようとする意欲が動いている」（前掲書『庶民の発見』一三六頁）。

「思慮深いある老農が私にこんなことをいった。『今日ほど農民指導者と称する人の多い時代はない。無数の人が指導者として農村に入りこんでくる。しかしその人たちはほんとうに農民の味方なのだろうか。いったいあの人たちの何人が農民の中で死んでゆくだろう。……いままでの例では指導に成功したと人々からいわれたとき、その人はたいてい農民からはるか離れたところにいた』（同書二七五頁）。

長々と引用したが、宮本の言葉は赤嶋と相通じるのではなかろうか。戦前から戦後にかけての農家・農村はこのような状況だったのではないか。守田志郎は言う。「部落が約束するものは、最大多数の最大幸福ではなく、**全員の中位の幸福**なのである」。ヨコ社会の構造を持っていたことを強調している。

こうした変化を知るには長期にわたる農村の定点調査が必要であるが、上記で紹介したもの他に私が知りえたのは、これまでも何度か取り上げた東北大学農村社会学グループの調査研究による庄内農村の四〇〇年間の歴史社会学研究（細谷昂『家と村の歴史社会学』二〇一二 御茶の水書房など）、太田敏兄『農民意識の社会学』（岡山県南部農村を一九二四・三四・五四の三回調査、一九五九 明治大学出版部）、石川英夫・中安定子他編『三農村の半世紀を読む』（青森県農村は一九二九～八四の五回調査、山形県農村は一九四九～八六の五回調査、三重県農村は一九六六・七九・八二の三回調査、一九八九 農文協）、高橋明善・蓮見音彦・山本英治編『農村社会の変貌と農民意識』（秋田県と岡山県の農村を一九五三・六八・八五の三回調査、一九九二 東大出版会）がある。

第三節 農業への就農

農家が永續していくためには、農家継承の問題がある。宮本常一は一九六五年に言う。「今日、農業ほど若い者たちに嫌われている職業はないであろう」。「昔は『農は百業の基』などといわれ、最も尊い職業だと言いつづけられてきた。それは一つのおだてであり、まやかしてであった。しかし、百姓たちはその言葉にのって、今日まで一所懸命に働きつづけてきたのであるが、尊い職業に対して、政府も社会もほとんど報いることがなかった。そして、気がついたときは、世間からおいてけぼりを食いはじめていたのである。女たちの中には、そういう運命を本能的に知っていた者が多かった」（『日本民衆史六・生業の歴史』

一〇、一三頁 一九九三 未来社)。姉齒曉『農家戦後の女性史—日本農業新聞「女の階段」の五十年—』(二〇一八 こぶし書房)は、宮本の発言を実証する。

農史研究者の黒正巖は、農民たちの根底に「我が子を育成するかの如く」「自己の子供の生長をたのしむが如く」「生産物に愛着を有する」といったものが流れていることを強調する(『黒正巖著作集』第七巻一五〇～一頁)。しかし農本主義については「昔から農は国の本だとか、一に百姓、二に殿様などといったけれども、之は農民をおだててよく働かせるための標語にすぎない。何人も真心からそう思っていたのではなく、内心は百姓を軽蔑していたのである」(同一五一頁)、と欺瞞性を暴く。

ではその後の農家継承、就農はどのように変わっただろうか。鯉淵学園の安藤義道による詳細な調査研究がある。一九八五年の『現代農村生活の課題と教育』(明文書房)では、長年の調査と教育経験をもとにしながら、農村婦人の実状を紹介して婦人の地位確立の方向を論じる。農業後継者の育成では「説得の論理」から「納得の論理」へ転換する必要性が説かれる。さらには農村地域リーダーの育成に関しては、赤嶋が紹介した三つの老農型(とくに第三の豪農型老農)は戦前型リーダーであり(同書第七・八章の各第一節)、現代では変わってきている。地域内のリーダーとしては、農業経営・技術先駆者型、農協型、政治活動中心型の三つがあり、リーダーの資質として組織化の必要性、組織に対する自己の確立、納得性の強調、説得性の能力、農業哲学の確立、思考の柔軟性の六点を挙げている。さらには地域外から改良普及員や農協職員などの外部リーダーの必要性も説いている。なお同書のあとがきには、次章で紹介する森川辰夫への謝辞が述べられている(同書二二六頁)。

『ザニューファーマー—二一世紀を担う後継者たち—』(一九九一 明文書房)では、茨城県内の新規就農者を学卒(七名、一九八五年調査)、Uターン(五名、一九八六年調査)、新規参入(五名、一九八七年調査)、研修経験(四名、一九八〇年調査)に分けてライフストーリーとして一人ずつ計二一名を紹介している。さらには研修生受け入れの農業者(五名、一九八〇年調査)もとりあげる。これらにより宮本常一、赤嶋昌夫の次の時代である一九八〇年代以降の状況が、とりわけライフストーリーとして紹介しているので、よくわかる。一人ひとりの心のひだにまで入り込んでいるすばらしい研究である。

『現代農民のライフ・ヒストリーと就農行動—「納得論理」型農民教育の創造—』一九九九 御茶の水書房)は、以上の研究を「ライフ・ヒストリー法」としてさらに発展させたものである。この方法を前著から採用したのは、従来のアンケート式の定量的な統計的調査方法では、就農行動というような人間の意識の成長を促すような構造を明らかに出来ないと限界を感じたからである(同書三六二頁)。安藤の鋭く柔い感性がよくわかる。そして都市的地域、平地・中間・山間農業地域と、四タイプの茨城県内全域でトータルに把握しようとする。学卒(七名)、Uターン(七名)、新規参入(六名)は、前著での調査をふまえて重複しているのもあり、新たに紹介されているものもある。時代の変化に応じて新たに大規模経営(七名、一九九三年調査)、女性(七名、一九九二年調査)、高齢(三名、一九九六年調査)が加えられている。これらは現代農民の就農行動を知る上で重要である。

他に安藤の最初の研究テーマであった農民文学・農民日記と農民教育の展開が論じられている。こうしてこれまでの伝統的農民教育は押しつけの「説得論理」による教育であったが、現代は自分で納得して就農していく「納得論理」の農民教育の時代になってきていることが明らかにされる。ではいったい何に「納得」するのか。

第二章 森川辰夫の農家生活リズム論

第一節 農家生活の重視

私はこれまで農法論を軸にして検討してきた。一一九頁の第一図の立面図の三つの主体—環境系では、一番下の労働主体—環境系である。前稿では、農業経営学・経営史にも言及した。一番上の経営主体—環境系である。まん中の生活主体—環境系については、イエ・ムラが問題になることを示しただけで、具体的な展開は一切できておらず反省する。守田志郎は、「農業の循環は農家生活の循環」(『農業協同組合』一九七四年二月号)と言うが、『むらの生活誌』(一九七五 初版 一九九四 農文協)では、主には村の組織や生活が語られ、労働との関りでは「苗取りのリズム」が言われるくらいである。守田が言う循環する農業労働と農家生活の関わりは、具体的には展開されなかった。マルクス研究においても生産過程の研究は数多くあるが、生活過程の研究は稀である。マルクスの原典研究である中野徹三『生活過程論の射程』(一九八九 窓社)、谷口孝男『人間社会の哲学』(一九九〇 批評社)、最近では田畑稔「マルクスの『生活過程』論」(田畑他編『二一世紀のマルクス』所収 二〇一九 新泉社)がある。

そこで生活主体に関して何かないかと調べているうちに、森川辰夫の『農村生活の構造—農家生活リズム論的分析—』(一九八一 明文書房)に出会った。驚天動地。まさにこれだ! 私が展開してきた「生きものの循環論」, 「生きまわしの農法」を具体的に実証的に展開しているではないか。森川の最初のまとめた研究は、一九七七年の「農家生活構造のリズム論的考察」(『中国農業試験場報告 C 農業経営部』第二二号)であり、次いで一九八一年の『農村生活の構造』である。その後はとくに農家生活リズム論に関しては展開されていなかったが、最近コンパクトにまとめたものが『今日に生きる「農家生活リズム」』(二〇一九 筑波書房)として出された。戦後から一九七〇年ごろまでの農家生活や農業労働の研究を細かく拾い上げ、森川自身も東京教育大学農学部総合農学研究室、同成田分室などで精緻な実態調査を二〇年以上にわたりやってきた。詳しい経緯は、農林省の研究機関をいくつか務めたのち弘前大学教育学部を定年退職した時に出版された『きいて かいて 学んだ四五年』(二〇一一 私家版)に書かれている。

本章ではこの唯一無二で刺激的な森川の研究を詳しく紹介する。一二〇頁の第三図は、農家生活の理念の構成を模式的に表したものである。広島県世羅台地の『人間優先の協業経営』(梶川静一 一九七九 家の光協会、梶川静一遺稿集『世羅台地の農魂』一九九三 私家版)として有名となった「世羅幸水農園」の梶川静一(一九一一～一九八三)の経験をもとにして、中国農試に勤めていた森川がまとめたものである。この図で左方向へ財産の増大を目指すのではなく、右方向へ生活、生命の重視へと意識的に努力することを強調

する。そして農業生産と農家生活を結びつけるものが「労働」であり、農家生活と人間の生命を結びつけるものが「健康」であるとする。なお、世羅幸水園については、山本陽三（『風と土と人と』第七章 一九七二 御茶の水書房）、団野信夫（団野編『農業における個と集団』一九八四 御茶の水書房）が紹介している。

森川の基本的立場は、人間の生きようとする、伸びようとする活力の实在を、人間の自然への働きかけである労働としてとらえ、あわせてその基礎となる食に注目する。生活の活力は生活意識の働きによって、常に生活上のバランスを回復しようとするメカニズムを持つ。伸びようとする力、その結果の不均衡状態、さらに新しい段階でのバランス、均衡を反復運動の時間的経過からとらえたものが「生活リズム」であるとする（『農村生活の構造』一九～二〇頁）。ただし、本稿では食、献立型などに関しては言及できなかった。

『生活リズム』とは、天体ならびに生物一般の周期的活動に規定される人間の体内を基礎とした、人間の実際の生活過程における周期的な行動の秩序であり、長短さまざまな人間生活における各生活周期ごとに、秩序ある生活現象の単位として把握される」とする（前掲書一九頁）。そして、第四図のように、天体と地球のサイクル、人間を含み生物界のリズム、広義の生活リズム（体内リズム・狭義の生活リズム・社会生活リズム）の三層からなり立っている。農作業リズムは、これら三つのすべてに関わる。これは私が言ってきた天のまわし、実＝身のまわし、手まわし・世まわしそのものである。

「サイクル」は天体に代表される物理的・機械的な運動について表現し、「リズム」は人間行動の周期的変動である。森川のリズムは、均衡を保持しようとする生命と、生命を取り巻く天体と地球のサイクルから成り立つのである。

自然環境的制約のもとで作物の成長に従って繁閑の差が大きい農業労働は、異なる仕事が続いて行われる「異種継起性」と、季節ごとに異なっている「季節性」の特徴がある。（大橋一雄『農業労働の質量的計測方法と栄養所要量の計測方法の研究』一六四頁 一九六〇 労働科学研究所、井上和衛編著『農業労働科学入門』一五〇～四頁 一九八六 筑波書房）。前者は農作業リズムの一つの要素であり、後者は年間における生活リズムの基礎である。つまり、**農作業リズム＋生活リズム＝農家生活リズム**となる。

次に具体的に見ていく。一二〇頁の第五図は、農繁準備期（四月中旬）の男性農業者の一日の生活リズムである。睡眠が八時間、農業労働が九時間、その他が七時間である。女性農業者の場合には、睡眠時間が減り、家事や育児の時間が減る可能性が大きい。

第六図は、農家生活リズムの重層性を表している。右端に生活リズム名、左端に農作業リズム名を記している。一番上の一層目は、田植え作業の場合の動作リズム・体内リズムである。苗植えの動作で腰を伸ばす短い休止が挟まる。これは呼吸のリズムと同調しており、身体としてはその基礎に脈拍のリズムがある。

二層目は、作業を組み合わせる作業リズムである。田植え作業では、一層目とは異なる苗運びの軽作業が組み合わせられて全体が進行する。苗を補充するという農作業の必要性から生まれているが、農家は体の動かし方も工夫して効率よく働こうとする。「段取り」と

いうリズムを意識しているのである。

三層目は、一日の生活リズムである。田植え作業の農繁期には、短い休憩を挟みながら、一二時間半もの長時間労働となっている。四層目は、週生活リズムである。これは普通の都市の労働者・生活者を想定して書いているが、実際のところ農繁期には農家生活リズムとしての週生活リズムは存在しない。

五層目は、長時間労働日とやや短い労働日との組み合わせで、田植え期全体が構成されている。一気に作業を進めようとする前半期と疲れと余裕のある後半期がある。六層目は、農繁期の前の農繁準備期とその後の疲労回復期の構成となる労働リズムである。ただし、月生活リズムと書いているが、実際には農家にとってそれほど意味のあるものではない。

七層目は、年間を通しての季節リズムとなる。季節というと四季を考えるが、農家生活のリズムからすると、田植えの農繁期の後の梅雨と言う疲労回復の季節、稲刈りの農繁期の野分（台風）の季節という六季の季節リズムが考えられるという。

第七図は、農家生活リズムの類型化を試みたものである。大類型は一年間を六季に分け、中類型は農作業の繁閑によっていくつかのタイプに分けている。小類型はさらに細かく就労形態によって分けている。そして左端に書かれているように年間リズムから、その人の一生の年代リズムがあることに注目している。年代リズムは加齢とともに低下していく。

第八図は、千葉県成田市の小規模稲作農家の経営主と主婦の一九六三年から八〇年までの一八八年間にわたる体重の変化である。きわめて貴重な記録であり、夫婦間で同調していることがよくわかる。まさに夫婦合い和しているのである。これが家族労作経営の基本であり、夫婦のヨコの関係が重要なのである。労働の「労」の訓読みは、「いたわる」である。さらには、下段の後半部では体重の変化が鈍くなっており、まさに活力が減退している。年代リズムの変化がみられるのである。

この農家は根本敏男・高子夫婦である。森川の転勤後は、後に紹介する中島紀一が調査を受け継いだ（前掲『きいて かいて 学んだ四五年』一三頁）。森川の恩師である菱沼達也は東京教育大学を定年退職した後、大学を去るにのぞんで『人間らしく』ということ」というエッセイを書いているが（『農業と経済』第四〇巻八号 一九七四）、そこに根本の菱沼に対する言葉が紹介されている。「君は田植えの頃になると、毎年学生を連れて来ては農家に分宿させて手伝わせた。しかし、自分たちから見ると、さっぱり役に立たないだけでなく、学生たちの態度には、コツンとくるものがあった」。

菱沼は退職時にそれまでの研究活動や「総合農学」の考え方などを『私の農学概論』（一九七三 農文協）としてまとめた。そこにこの根本夫婦の体重変化に関するコメントが書かれている。「農民は農繁期のダウンをできるだけ軽くくいとめるために、その前に食事の量をふやしてスタミナをつけている。それも、意識的というよりは永年の習慣から、自然に自分の体をそうもって行く。そして、さらに私が驚いたことは、第五図（森川辰夫君作成）にみる夫婦の体重の並行的な動きである。この夫は人一倍頑健であるが、この妻は心臓の持病を持つ病弱な人である。・・・夫はいつも妻をかばっているが、そうかといつて、かばい過ぎれば自分が過労になって倒れてしまい、その結果はいっそう妻の負担

を増す。だからそのかね合いが大切なのだが、この六〇歳に近い夫婦は、みごとに、それをやってのけている。では、何が彼らにそうさせているのだろうか。まず、夫婦の愛情をいうべきであろう。そして、この労働の分配は、その愛情が、のんびきならぬ生活の中でつかんだ知恵というべきではあるまいか」（前掲書一八三～四頁）、と述べている。菱沼は同書の最後に「農学の研究は、その中心に人間をすえなければならない」（前掲書四三〇頁）、と結んでいる。なお、森川・中島の「稲作型」は、本稿では言及できなかった。

森川は一九八一年に、一九七〇年頃までの農家生活リズムを考証することで、一国の生活様式の原型はつねに農家の暮らしに見いだされ、農家生活のリズムの諸相は、今日の日本人の生活にとって規範となりうると述べていた（前掲書『農村生活の構造』六頁）。一九七〇年代以降、急激な農外就業への傾斜、工業製品の農村市場への進出、伝統的生活様式の破壊が進行している（同書七頁）。一二〇頁の第三図で言えば、生活理念が左方向にのみ動き、所得獲得第一主義に陥っていると言えよう。

二〇一九年に森川は主張する。自分の「生活リズム」を持つことは、現実に自分を大事にするという、基本的人権の一つである。とりわけ八時間の睡眠をとる事が基本の基本であり、そして八時間の労働、残りの八時間が暮らしのための家事や生理的・社会的時間であり、この八・八・八という時間配分による生活リズムの確立を提案している。さらには食生活においても、現代版の「一汁一菜」の献立が大切とする。

もう一つ森川の大切な主張は、「地域社会リズム」を確立していこうという提案である。かつて「農村型地域社会リズム」を提案したが（「農村生活の特徴を活かした暮らし方を考える」 吉田喜一郎監修『地域社会農業』所収 一九八五 家の光協会）、今後はとくに重要となる（前掲書『今日に生きる「農家生活リズム」』Ⅲ）。

農村生活研究においては、森川の農家生活リズム論を継承する者は現れていない。森川の「農家における生活リズムの展開」（『農村生活研究』第四二号 一九七七）では、最初の中国農試での研究に対する批判にコメントしているが、一九九五年の「農村生活研究が取り組むべき今日的課題」（同第三九巻一号）、「農村生活研究への諸批判にお答えして」（同第四二巻二号）では、とくに農家生活リズム論への言及はほとんどない。『生活者の創る農とくらし』（一九九三 筑波書房）、『むらの話題、世間の話題』（二〇〇四 筑波書房）でも、積極的な展開はない。再び農家生活リズム論を二〇一九年の『今日を生きる「農家生活リズム」』でとりあげたのは、「畏友」（実際は教え子？）の中島紀一茨城大学名誉教授の慫慂があったからだと述べている（同書八六頁）。同書に関しては、飯塚里恵子が書評を書いている（『農村生活研究』第六四巻一号 二〇二一）。

森川辰夫（一九三六～）は、東京教育大学農学部で菱沼達也に学んだ。一九五二年の創設された「総合農学科」の第四期生（一九五四年入学）で、一年生の時に菱沼は関東東山農業試験場より赴任した。そして卒業後、菱沼のもとで一九六〇年より助手を務める。一九五九年から千葉県成田市豊住地区に入って実学的な研究を行い、一九六五年に豊住地区南羽鳥部落に東京教育大学農学部成田分室を設置した。根本夫妻の居住地である。成田分

室では『村と学校を結ぶ』という研究報告を一九六五年から七四年まで計七冊刊行している（第五～七報は未見）。この分室の活動については、菱沼自身が回顧している（菱沼前掲書一三四～一八五頁）。森川は一九六九年より農業技術研究所、七四年より中国農業試験場に勤務する。森川の農家生活リズム論はこの時にまとめられる。

森川に執筆をすすめた中島紀一（一九四七～）は、総合農学科が廃止された翌年の一九六五年に入学した。成田分室でも学生として活動している。大学院を経て一九七二年より助手となる。菱沼は一九七四年に定年退職する。

先ほど就農行動で紹介した安藤義道（一九四六～）は、総合農学科ではなく農村経済学科を一九六九年に卒業した。農村教育学を濱田陽太郎（『近代農民教育の系譜』一九七三 東洋館出版社）、赤司政雄（濱田らと共著『世界教育史大系三五 農民教育史』一九七七 講談社）に学ぶ。大学院を経て、一九七二年より鯉淵学園で教えている。中島は一九九三～二〇〇一年まで鯉淵学園で教えている。

「総合農学」に関しては、中島紀一の考察がある（『戦後農学史における『総合農学』』初出は一九九三 中島『野の道の農学論—「総合農学」を歩いて—』第一章 二〇一五 筑波書房、また中島「大学農学部における農村生活研究」も参照 日本農村生活研究会編『農村生活研究の軌跡と展望』第二章第三節所収 一九九三 筑波書房）。

「総合農学」とは何だったのであろうか。

第二節 農家生活研究の軌跡

森川の利用した資料は、ほとんどが戦中から戦後一九七〇年頃までのものである。その時期には、農村生活の実態を明らかにしようとする研究、調査が盛んに行われていたのである。とくに農林省関係の研究機関や府県の農業試験場、そして労働科学研究所などである。そこには農村生活の改善を図ろうとする情熱があった。

東北農業試験場の山岸正子（一九一三～九七）は、一九六〇年に「農家生活の近代化、向上化への道は労力提供者とし課される農業労働から婦人が解放されることが重要な基礎条件であろう」。「以上述べた事によって、戦後における婦人労働は労力提供者的な役割から徐々に解放されていることが理解された。ところで、農村婦人は家事労働、農業労働の二重の負担を背負っているばかりではなく、母性としての任務をもっている。ことに妻や主婦の根幹労働力としての期間が、同時に母性活動としても重要な期間であり、ここに妊娠期間の農業労働と産前産後の休養は単に母性保護の点からのみ重要されるものではなく、家庭生活の主体者（と 徳永補記）して人間性の重視という観点からも保護されなければならない」（農林省振興局研究部監修『農業技術年刊 農業経営編・農村生活編 合本』七五八、七六八頁 一九六〇 養賢堂）、と訴えている。

山岸は一九四二～四四・四五年頃まで労働科学研究所に勤めて工場の調査などに従事し、四四・四五年ごろに東亜農業研究所に入り錦織英夫の助手となる。一九四五年から青森県の農林省農事試験場三本木原営農支場に勤めることになる。同支場は一九五〇年に東北農業試験場に統合される。戦後の農村生活研究を主導した錦織英夫は、一九七五年に「昭和

二〇年創設の農林省農事試験場三本木原営農支場農業経営部にはじめて生活研究室を設け、山岸正子（最初の女性農林技官、当初農家の炊事手伝いをしたり、物売りまでして研究に専念した）を中心に生活研究に着手した」（兄玉賀典・君塚正義共編著『農村生活の現代的課題』二頁 明文書房），と回顧している。

一九五八～六四年まで山岸の下で研究指導を受けた橋本恵次は、「小柄なお体一杯に漲る鋭い発想と、ねばり強い行動力には、感嘆する他なかった」（「二人の上司と」『研究成果五〇年：東北農業試験場の歩み』四四〇～一頁 一九九九），と回顧している。橋本の初仕事は山岸・長谷川宏二との共同研究『兼業農家の生活構造』（一九五九 農林省振興局研究部）であった。山岸の執筆と思われる「研究目的」は、次のように述べている。「農家生活研究の目的である農家生活の向上、或は近代化ということを極く端的にいうならば、より高度なバランスをもった労働手段と生活手段とを媒介として、農家家族員個々の欲求及び意志が生かされ、且つ具体的にも健康な生活が実現されることであろう。ところで、現実の農家生活において、これらが実現されにくいということは、単に所得水準が低く、農業労働が激しいということではなくて、家族員の意志欲求が農家の家、並びに部落の秩序に埋没されているということにその基本的な原因があると考えられる。

しかしながらこれを崩す一つの契機は商品生産並びに兼業であるといわれているために、われわれは先に水田単作地帯の生活構造に関する研究を行ってきたが（徳永注 山岸正子「東北水田単作地帯農家の生活構造」『東北農業試験場研究報告』第七号 一九五六），更にこれに対照して蔬菜地帯の生活構造の研究を行い（徳永注 山岸・長谷川「そ業地帯における農家の生活構造」『東北農試生活研究室資料』一九五七 未見），ここに兼業農家の生活研究の生活構造に関する研究の課題をとりあげたのである。もちろん家及び部落の秩序を崩す契機となるものは四日クラブ、農事研究会、或は生活改善グループ等による新しい組織によって、古い秩序を破壊している傾向が目だってきている。しかし、農家内部から崩壊させるものは商品生産と兼業であり、これらの内部条件と外部条件によって農家生活の近代化が進行するものと考えられる」（『兼業農家の生活構造』三頁）。山岸の問題意識がよくわかる。農林省振興局研究部研究企画管理官の森秀男は序文で、山岸技官のこれら生活構造の三部作は「農家生活に関する研究の基盤となるべき農家生活の地域的類型を明らかにするための貴重な業績」であると高く評価している（前掲書一頁）。

農村生活研究、とりわけ農村婦人労働研究の開拓者であった山岸正子の生涯については、大門正克の詳細な研究がある（「もう一人の農村女性研究者、山岸正子—戦後の東北を拠点にして—」『女性史学』第一五号 二〇〇五）。困難な状況の中で農村生活研究を開拓した山岸に、心から敬意を表する。

大橋一雄は労働科学研究所を中心として三〇年にも及ぶ農村調査を通じて、「私は学問とは人間を離れては存在しないこと、具体的にいうと人間生活の中に行われていることの科学的実証である、という考え方をもったのである。たとえば、在来農法として疎んぜられている農作業慣行の中に存在する科学性、これを頭から否定することがいかに誤りであったかが、今日では事実として証明されている、と私は考えている」（『日本農業労働論』

二九二～三頁 一九八六 筑波書房), と述懐している。「東北農民の早老」(一九五九)をはじめとしたこの代表的な論文集の他に、大橋の調査体験を語ったものには、『農村(ムラ)は変わらない―農村調査三〇年―』(一九七七 農林統計協会), 『農村生活譜―農村調査始末―』(一九八〇 日本経済評論社)がある。労働科学研究所の創設者である暉峻義等の「現場が師匠です。現場からよく学びなさい」(『日本農業労働論』二八四頁), という調査態度を三〇年間にわたり貫いたのである。

一九五〇年代から六〇年代半ばにかけて、農業経営研究において農村生活研究はそれなりの部分を占めていた。沢村東平(農林省農業技術研究所経営土地利用部長)・森秀男(農林省農業改良局技官)編『あたらしい農業経営』(一九五四 朝倉書店)では、森秀男が「経営と生活」を執筆した。「全国にさきがけて自動耕耘機をとり入れた村として有名な岡山県の興除村は、経営規模、土地条件、村の社会的条件等がよかったことにも、勿論よるけれども、それだけでなく冬の最中寒風に吹きさらされながら一ヵ月にも亘って耕地を起す仕事から妻を解放してやりたいという男たちの気持が大きく働いていた。これは経済を超えた問題である。興除村だけでなく、主婦達によって強く支持されているために自動耕耘機の安定している村の例は少くない。こうすれば主婦は過重な労働から解放されて自身の健康の増進されることは勿論、更に家事にもっと力を入れることが可能になるので**家族全体の幸福**が増進されるであろう」。「経営は生活を見捨てては考えられず、生活は経営の特質の上になり立っている」。「経営改善は生活を高めるためのものであり、生活改善は経営をより発表(展カ 徳永補記)させるためのものでなければならない」(前掲書一〇〇～一〇一頁), と農業経営と農家生活の連動の視点を強調している。また同書は最初に全国六地域の農業経営を論じているのも大きな特徴である。

一九五六年の森秀男(農林省農業改良局研究企画官)編『農村生活科学綜典』(朝倉書店)は、農村生活全体を扱う。森は最後に「よく農民に生活向上の意欲がないことがいわれる。しかし人間である以上、意欲の全くないのはむしろ珍しく、なんらかの意欲を有するはずである」。「一般に意欲がないといわれるのは、指導者側に農民の真の意欲を汲みとる力が欠如しているか、汲み方が当を得ていないばかりの方が多い」。「重要なのは、指導者意識によって割り切った意欲のあるなしではなく、底に深くひそむ意欲を汲みとることであり、さらにその意欲を地表に芽生えさせることである」(前掲書四一三頁), と農村生活を改善する態度を指摘している。同書では、佐久総合病院長の若月俊一が農民の健康を守るために、子供を健康に育てるために、「保健と育児」を執筆している。

森秀男は、戦前に朝鮮農事試験場に勤め、西鮮支場長の高橋昇の教えを受けた。森の戦後最初の著書『日本農業地図(作付歩合)』(一九四八 実業教科書株式会社)の見返しには、「此の小著を今は亡き恩師農学博士高橋昇先生に捧ぐ」と、大書されている。そして嵐嘉一他『旧朝鮮における日本の農業試験研究の成果』(一九七六 農林統計協会)には、高橋昇の貴重な思い出を書き残している(同書七七一～八一三頁)。森は農林省在職中より退職後もインドネシアやバングラデシュなどの農業開発の海外協力に献身した。それら

の経験を記した『スマトラの曠野から』（一九七七 NHKブックス）は、「隣人とともにいつまでも、いつまでも手を取りあって生きてゆくためには、もうこの辺で日本国民全体が決断すべき時である。他国に追従するのはやめて、独自の道を歩もうではないか。飢えのために死んでゆく子どもの一人もいないような地球に一日でも早くしようではないか」（同書二〇六～七頁）、と結ばれている。戦前の朝鮮農試、戦後の農村生活研究、そして海外協力、森に流れる日本・アジアの農民への一貫した眼差しは温かくそして厳しい。

山岸のところで紹介した一九六〇年の『農業技術年刊 農業経営編・農村生活編 合本』では、農林省振興局研究部長の錦織英夫が序文を書いている。農業経営編が七四六頁、農村生活編が二七八頁ある。山岸は農村生活編で計四七頁執筆している。執筆者は振興局、農業技術研究所、東北農試など地方農試、府県農試に所属する者である。唯一の例外は、農民の保健（農村の保健問題、農民の疾病）を書いた若月俊一医師である（『村で病気とたたかう』一九七一 岩波書店）。森や錦織がこの問題をいかに重視していたかがわかる。

錦織英夫（農林省農林水産技術会議研究参事官）・森秀男（同研究調整官）・岩崎勝直（東北農業試験場長）編『農業経営講座』全四巻（一九六一・六三 朝倉書店）では、森が執筆した第四巻の第一章「農業経営と生活改善」のみであり、農村生活が全体に占める割合はきわめて小さくなっている。沢村東平（農業技術研究所土地利用部長）編『農業経営ハンドブック』（一九六五 朝倉書店）では、農村生活については全く触れられていない。一名を除きあとはすべて経営土地利用部の者である。こうして農業経営研究と農村生活研究は、一九六〇年代後半には分離してしまった。なお岩崎勝直に対しては、一九七三年に東北農試のメンバーにより西垣一郎編『農業経営と規模拡大』、一九七四年に「岩崎山脈」から流れ出た者たちで兄玉・小笠原編『農業経営の現代的課題』（いずれも明文書房）が献呈されている。前者には岩崎が「東北における農業経営研究の歩み」を書いている。さらには『岩崎勝直遺稿集』（一九八二 岩崎さち・私家版）がある。東北農試・県試験場を中心にして現場的経営研究者・農学的技術研究者を育てていったのである。

「農村生活研究会」は一九五七年に会員二百名で出発し、一九七六年に「日本農村生活学会」となっている。農村生活研究の動向については、一九七五年の兄玉賀典・君塚正義共編著『農村生活の現代的課題』（明文書房）がある。錦織英夫（前日本大学教授）は序文を寄せて、「農村生活はいよいよ複雑多岐に亘って広汎な係わり合いをもって進展しつつある。今こそ、これからの農村生活の合理的な在り方を見つめて、これが実現のための総合的な研究が強く要望される」（同書四～五頁）、と述べている。続いて一九八七年の農林水産技術会議事務局編『農林水産研究文献解題 No. 13 農家・農村生活編』（農林統計協会）、一九九三年の日本農村生活研究会編『農村生活研究の軌跡と展望』（筑波書房）で知ることがきる。

錦織は戦前には北京大学農学院教授・農村経済研究所研究員であり、熊代幸雄・西山武一・渡辺兵力・鞍田純（後に鯉淵学園長）らと同僚であった。一九四四年から東亜農業研究所所員、一九四五年から農事試験場三本木原営農支場長、一九五〇年から東北農業試験

場長を務める。一九五二年に「三本木原営農支場の営農研究」(『東北農業試験場研究報告』第二号)について、それまでの農業研究は分析的、部分的、一面的であった。分析法による単純な一般性に関する理論研究が重視され、複雑な条件下にある農業の個性研究が軽視されたため、農業地理学や農業史学が不発達で農家経営の現実在即した研究が少なかったと、厳しく批判する。営農支場は農業の総合的研究、本来一体化されるべき技術研究と経済研究を密接につなぐ結節点の役割を果たそうと意図してきた。錦織は晩年に「農の総合性」こそが『農のこころ』(一九八四 日本イリゲーションクラブ)、と述べている。

「総合的な研究」とはどのようなものを構想していただろうか。

第三章 生きものはなぜ循環するのか

第一節 太陽の光エネルギーが原動力

私は森川の研究は画期的であると高く評価する。ただし、農家生活のリズム論からして当然ではあるが、一二〇頁の第四図での天体と地球のサイクル、私の言葉でいえば「天のまわし」への位置づけが弱いのではなからうか。農業は生命を取り扱う有機的なものであると言われるが、さらに根源的には太陽からの光エネルギーによる光合成である。そして太陽系における地球という惑星の一年周期の公転、そして一日周期の自転により様々な自然現象が起きている。

前稿で紹介した植物生理学の佐藤直樹は、「生物が自発的に活動するように見えるのは、まさに、こうした不均一性に基づいており、それはもとをたどると、太陽の光にたどり着く。太陽は生命の究極の駆動力である。昔の人々が生物の自発性を説明するために、特別の生命力を仮定しなければならなかったのは、実はこの太陽がもたらす駆動力に気づいていなかったからである」(『創発の生命学』一三六～七頁 二〇一八 青土社)、と述べる。

沢村東平は一九六〇年に早くも、「もともと農業は光合成産業そのもの、あるいは光合成に立脚する第二次生産である。耕種が前者で畜産が後者である。耕種という光合成産業において水・空気・肥料などは原料、農業は補助原料であり、作物そのものが合成のアパラス(化学的装置 徳永追記)、土壌や機械は補助装置であり、光はエネルギーであると考えられる。このような複雑な光合成産業において上に述べた肥料・農薬・機械についての技術は全技術体系のなかの極めて小さい部門にすぎないのである。光合成の中心である主要装置(作物)そのものの機能の改良(育種)と、作物機能の生理学的研究、あるいは補助装置である土壌の物理的・化学的・生物学的研究などが光合成産業の生産力向上に寄与していることも見のがすことはできない」(前掲書『農業技術年刊 農業経営編・農村生活編 合本』三〇～三一頁)、と述べている。

さらに一九六五年には、農業生産は「要素」(イネ・果樹・家畜などの主装置、土壌・機械・農舎などの補助装置、肥料・飼料・水などの主原料、農薬などの補助原料からなる)を、光エネルギー(他に空気・湿度など)を「原動力」として、「生産物」(コメ・果実・野菜・飼料などの一次生産物、乳・肉・卵などの二次生産物)に変化していく過程である(沢村編『農業経営ハンドブック』二頁 朝倉書店)、と定義している。一九六七年にも、

「農業生産を技術の面からみると、一種の光合成産業である。日光を原動力として、酸素・水素・炭素・窒素その他の元素の合成を行なう産業である」(『農場経営学総論』二七頁 東京農業大学)、と一貫している。

そして最後の著作となった一九八九年の『農業生産の時間的管理と分析』(養賢堂)では、生物系生産の起点は植物系の光合成であるとして(二頁)、一年生・多年生植物生長の光合成速度に関わる諸要因との関係を分析している。さらには短期植物反復生産(果菜類)、長期植物反復生産(果樹)、短期動物反復生産(卵鶏)、短期動物一回生産(肉用鶏・肉用豚・肉用牛)、長期動物反復生産(乳牛)に分けて、様々な経営分析を行っている。反復生産に関して、周期反復、リズムの存在は生命に基本的な事象であり、生物体を構成する細胞の自発・自律的な、また遺伝的なリズムに起因し、それが器官のリズムに統合され、さらには個体のリズム、集団のリズムへと発展し、**リズムの階層体系**が成立する(一三頁)。これらのリズムのために農業生産は季節性を持つことになり、生物リズムの中には概日リズム(サーカディアン・リズム)などがある(一六頁)。沢村の視点は、まさに森川の農家生活リズムのそれと重なるといえよう。沢村もまた一九二八年から三三年まで朝鮮農事試験場西鮮支場において、高橋昇支場長の薫陶を受けた。

原動力である太陽そのものもまた、黒点周期のリズムがあることはよく知られている。文系の立場から長年太陽黒点を研究してきた住田紘は、「地球は、太陽から光と電磁波などを受けながら、昼と夜という、生命・生活活動の、基本サイクルの影響を受けている。しかし、あまりに日常的なので、人々は、その恩恵を意識しないことが多い。ただし、太陽光による植物の光合成こそが、二酸化炭素を吸収し、酸素を供給しているという基本の関係については、みな子供の頃から知っている。動物、昆虫などの生存は、土壤中の菌類、植物などを基にした光合成、食物連鎖などを介し、ソーラー・エネルギーという自然循環型エネルギーによって、歴史の過程を維持してきた経緯がある。大気・水質系の環境は、こうした関係において、久しく維持、保全されてきた。そのようなエネルギーの基になる太陽活動(黒点数変動)は、人間社会にも影響していることが考えられる。また、人間社会の経済活動にも、影響が派生している可能性をもつと考える」(『太陽黒点と歴史の脈動』五～六頁 二〇一〇 文芸社)、と述べている。私もこの住田の視点に賛成である。住田は二〇一三年に逝去するが、長年の研究を総括したものが『太陽黒点と気候・社会変動』(二〇一二 ナカニシヤ出版)である。

本誌の第七二巻一号で、川喜田二郎の温量指数を紹介したが、これも当然ながら太陽からの光エネルギー、輻射熱と関わる。太陽黒点の五五年周期説の吉村サイクルや景気変動のコンドラチェフ波などを扱ったものとして、嶋中雄二の『太陽活動と景気』(初版は一九八七 二〇一〇に日経ビジネス人文庫)がある。

森川はリズム論の参考文献として、クラーゲス『リズムの本質』(杉浦実訳 一九七二 みすず書房)をあげているが、とくに紹介などはない(『農村生活の構造』五四頁)。森川は他にもリズム論の文献をあげているが、おもに音楽のリズムに関するものである。森川

の農家生活リズム論にとって直接関わるクラークスの見解は大変重要であるので、ここで紹介しておく。「もろもろの個体生命の生命リズムは疑いなく互いに異なっており、それも特に種と属とに従って異なってくる。しかしだからといって、これらのリズムがそれにもかかわらず同じ形を示すということの、つまりすべての任意の個体のリズムと万象を包みこむ宇宙のリズムとのあいだにある連関のために同じ形を示すということの妨げになるわけではない。人間の睡眠と覚醒の交替や、多くの動物のそれに対応する交代だけが昼夜の交代と一致するのではなく、人類とかけ離れた生をいとなむ植物界の生命のメロディーもこのリズムに従っているのである。……数え切れない多くのものが宇宙のリズムに組み込まれているのが見られる。そして太陽のリズムに月のリズムが交叉する」(『リズムの本質』二〇一一 うぶすな書院 平澤伸一・吉増克實訳一一三～四頁 付録二の『心情の敵対者としての精神』千谷七郎・平澤・吉増訳 二〇〇八 うぶすな書院よりの引用)。山崎正和は、杉浦実訳によりクラークスのリズム論を紹介しているが(山崎『リズムの哲学ノート』第二章 二〇一八 中央公論新社)、クラークスの全体像の把握にまで及んでいないと私は考える。森川の農家生活リズム論は、このクラークスのリズム論を農業において実証したものとして、きわめて貴重な研究成果である。

クラークスのリズム論に学んだ三木成夫は次のように述べている。生物リズムは、身近な心臓の鼓動と呼吸の波動を中心に、細胞の波から日常の睡眠と覚醒、季節的な活動と休息の波を経て、食から性への交代の波を繰り返し、種の興亡の波にまで及ぶ。生物リズムと宇宙リズムは結びついており、生物リズムを代表する食と性の波は、宇宙リズムを代表する太陽系のもろもろの波に乗って無理なく流れ、生と無生の違いこそあれ、両者は完全に融け合って一つのハーモニー「宇宙交響」を醸し出すとする。

「植物のからだは、動物の腸管を引き抜いて裏返しにしたものだ。根毛は露出した腸内の絨毛となって、大気と大地に体を開放して、完全に交流しあう。両者のあいだには生物学的な境界線はない」。「植物とは、だから自然の一部というより、自然の『生物学的な部分』といいかえることができる。だからまた、その地方の大気と土壌の性格が植生と表裏一体となるのも当然であろう。植物と宇宙との交流は」直接的である。動物の内臓系はまさに植物器官であり、大宇宙から仕切る体壁系によって内蔵される。そして体内の「小宇宙」が「大宇宙」と交流することになる(『胎児の世界』一八八～一九五頁 一九八三 中央公論社)。森川の一二〇頁の第四図の主張と重なっている。まさに天のまわしー実＝身のまわしー根まわしである。三木に関する最新の紹介は、和氣健二郎他編『発生と進化ー三木成夫記念シンポジウム記録集成ー』(二〇二〇 哲学堂出版)である。三木に関しては、吉増克實「三木成夫といのちの世界」(日本幼稚園協会『幼児の教育』第一〇一卷四・六・八・一〇・一二号、第一〇二巻二号 二〇〇二～三)が参考となる。

これは何も三木だけの見解ではない。今西錦司は最初の著作『生物の世界』で「消化管の管内といふものは考へようによつては外界がわれわれの身体にまで入り込んでゐる部分であり、環境の延長とも考へられる。生物は完結体だなどいつてもその身体はこういふ

意味で、その身体の中にちゃんと環境を担ひこんでゐるのである」(『生物の世界』六二頁一九四〇 弘文堂、講談社学術文庫版六一頁)、と述べていた。

江戸農書の作者もまた気付いていたことはすでに紹介した(『大阪経大論集』第七二巻二号六五頁)。一太陽年を二四分割した立春や夏至などの二四節気、土用や半夏生などの雑節、そして太陰暦などは、江戸農書では農作業の重要な節目となっている。三木自身も「農作物の『種まき』から『収穫』までの一生に符された『節』が十干十二支となっている……立春から大寒まで、古来、一年の暦は二四節気に丹念に区切られる」(『胎児の世界』一八九頁)、と指摘している。ドイツの人智学のルドルフ・シュタイナーは、大地の諸力・宇宙の諸力と農民との相互交流作用による農業の重要性を説いている(『農業講座』一九二四講演 二〇〇〇新訳 イザラ書房)。

江戸農書の「耕作術」(津軽 一七七六)に書かれた「寒三十日の刻積(こくつもり)」(『日本農書全集』第一巻三〇頁)は、二〇〇〇年までの調査で「寒だめし」として北海道から東北・北陸・山陰地方で行われていた(徳永『日本農法の天道』三四～五〇頁 二〇〇〇 農文協)。農家はその他にも様々な方法で天気予測をしている(農文協編『農家が教える天気を読む知恵とワザ—雲と風を見る・指標植物・寒だめしと暦・気象データ活用一』二〇二〇 農文協)。福島県で農業指導をした新堀嘉一(一八七五～一九五二)に教えを受けた斎藤善三郎、さらに斎藤から学んだスイカの名人である山形の門脇栄悦は、協力してさらに詳しい天気予測を行っている。寒だめしとともに、太陽(夏至や冬至など、黒点活動)と金星(地球までの距離による近日点、遠日点)の動きを軸にして八タイプの気象型がある事をこれまでの歴史的な気象資料から導き出している。それによりある年がどのタイプに当たり、寒だめしの結果と合わせて農事気象予測を誰にでも使えるように公開している(徳永前掲書六六～七一頁)。「観天望気」のここらである。

今後の天候予測ではなく、過去の気候変動の結果は、宇宙と生きもののたちのリズムの痕跡といえる。中塚武は『酸素同位体比年輪年代法』(二〇二一 同成社)により数千年前からの古気候の変動を明らかにして、考古学・歴史学に大きな刺激を与えている(中塚監修『気候変動から読みなおす日本史』全六巻 二〇二〇～二一 臨川書店)。

第二節 (修正) ロジスティック曲線による人類史

生きものたちは太陽光をエネルギーとして循環している。人類という生物種もまた他の生き物たちと同じ原理で生き続ける。鬼頭宏の研究(『人口から読む日本の歴史』二〇〇〇 講談社)によれば、日本の人口の推移にはこれまでに四回の人口増加の波があった。縄文時代前期、弥生時代から奈良時代、一四世紀の南北朝期から一七世紀の江戸前期、そして一九世紀から現代である。こうした「画期」の前には「停滞期」がある。植物生態学の宮下直は、こうした画期→停滞→画期の繰り返しを、生態学のロジスティック成長のモデルを拡張することで説明している。ロジスティック成長は、生物一般の個体数の変動を記述する基本モデルである。初期には個体数はネズミ算的に増加するが、増加率は次第に鈍化し、やがては増加率が0になる。個体数の時間変化が一二二頁の第九図のようにS字

型の成長曲線を描くのである（宮下直・西廣淳『人と生態系のダイナミクス ①農地・草地の歴史と未来』一九頁 二〇一九 朝倉書店、第九図は見田宗介『現代社会はどこに向かうか』八頁より 二〇一八 岩波書店）。

人間以外の生物では通常こうした個体数の停滞を打破することは出来ないが、人間は知性や創造力で環境からの圧力や限界を何らかの手段で停滞を克服して、第一一図のように次なる画期を作り出してきた（宮下・西廣著一九～二〇頁）。

しかし、社会学の見田宗介は第九図で、Ⅲの部分で点線のように下がっていく「修正ロジスティック曲線」を指摘している。ある生物種は、繁栄の頂点の後に滅亡にいたる。再生不可能な環境資源を過剰に浪費してしまった愚かな生物種である。地球という有限な環境下の人間という生物種もまた、この「修正ロジスティック曲線」を免れることは出来ない。実際に世界のエネルギー消費量は、第一三図のように一九世紀から爆発的に急増している。世界の人口の増加年率の推移は、第一四図のように一九七〇年を尖鋭な折り返し点として、急速にかつ一貫して低下させている。こうした動向を検討して、見田は人類史を大きく第一五図のように描いている。現代は近代の爆発期のあとで、安定平衡期に軟着陸できるかどうかの重大な転回期であると捉える（見田前掲書八～一一頁）。

なお見田は「ロジスティック曲線」に関しては、ベルギーのフェルフルストによって一八三八年に提起されたことは明記している（同書一一四頁）。「修正ロジスティック曲線」に関しては、「と呼ぶ生物学者もある」（同書八頁）と書いているのみである。『社会学入門』（二〇〇六 岩波書店）でも「修正ロジスティックス曲線」を紹介しているが、「とよぶ研究者もある」（同書一四五頁）としか書いていない。どういうことか。

この点について疑問を持った桜井芳生は、この「修正ロジスティック曲線」の出典が古田隆彦の『人口波動で未来を読む』（一九九六 日本経済新聞社）での「変形ロジスティック曲線」、それを改名した第一〇図の「修正ロジスティック曲線」（古田『凝縮社会をどう生きるか』二八頁 一九九八 NHKブックス）ではないかと推測している（「見田『入門』「高原」・（修正）ロジスティック曲線再考」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第八三号 二〇一六、ほぼ同内容で「見田宗介教授『社会学入門』における出典処理の問題点」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』第四号 二〇一七）。「修正ロジスティック曲線」を主張している研究者は他には誰もいないので、桜井の推測は妥当であると私は考える。また見田は「多段式ロジスティック曲線を主張する論者」がいると言っているが（見田『現代社会はどこに向かうか』一一八頁）、誰の事かはわからない。古田は一九九六年に第一二図のように「多段階人口波動曲線」によって人口抑制と人口増加が循環を繰り返すと主張した。それにもとづき日本列島の人口波動を検討している（古田『人口波動で未来を読む』七～一一頁 なお、古田『日本人はどこまで減るか』二〇〇八 幻冬舎も参照）。この考え方は、先ほどの第一一図の宮下の考えと一致している。

見田の考え方に同調する加藤典洋は、『人類が永遠に続くのでないとしたら』（二〇一四 新潮社）、と発問する。農業や農村についてはどうであろうか。薄井清は、『東京から農業

が消えた日』(二〇〇〇 草思社)を上梓し「農業の未来に光はあるか」、寺西俊一は編著で『農家が消える』(二〇一八 みすず書房)、と発問する。

薄井清は『東京から農業が消えた日』で書いている。消費者は、戦後すぐの食糧難の中、「腹」を満たすものなら何でも食べた。高度経済成長で次第に豊かになり、ある程度満腹になってくると、「口」に入れて味の良いもの、さらには、「目」でみて見栄えの良いものへと移ってきた。ところが有吉佐和子の『複合汚染』(一九七五)で農薬使用が問題になると、「頭」で安全と判断できるものへと変化した。有機農業や産直運動を生み出し、現在まで続いている。腹→口→目→頭と、食べる身体 of 場所は変わりながらも、商工業を軸とした経済成長を国家的目標として歩み、国際分業論に基づく食料輸入政策の下、食料自給率は一貫して減少し、今やカロリーベース総合自給率は二〇一七年度で三八%にまで低下した。何だかんだ言っても輸入で何とかなってきたではないか、という安心感。このような中、近いうちに「日本から農業が消える日」が来ないとも限らない。

「頭」の次に来るものは何だろうか。薄井は、「心」をあげている。私は、腹→口→目→頭の身体と農業が結びつく「身土不二」(山下惣一『身土不二の探究』一九九八 創森社)だけではなく、生産者と消費者がさらに心を通い合やす、自然と人間、とりわけ「ここ」(情・心)と一体となった「心土不二」の時代が来ていると考える。

これを三木の見方からすると、腹→口は植物性器官で食べているのであり、目→頭は動物性器官の脳髓に篡奪されてしまったのである。再びここ(情・心)で食べるというのは、ここを生み出す植物性器官の原点に立ち戻るということである。最近、食と農の倫理が言われているが(秋津元輝他編『農と食の新しい倫理』二〇一八 昭和堂、ポール・B・トンプソン『食農倫理学の長い旅』二〇二一 勁草書房など)、この視点こそが食と農の本来的な結合、倫理なのではなかろうか。

終章 三つの主体—環境系をわける・つなぐ・くくる

本稿では、主体—環境系を労働・生活・経営の三つに分けて考えてきた。分ける分析・分類したからには、つなぐ総合、くくる統合をしなければならない(立本成文『地域研究の問題と方法』(増補改訂版)第一〇章 二〇〇一 京大学術出版会)。そして「本来のあるべき農業」、「総合農学」、「総合的研究」とは何か、問題を残したままであった。三木は一九八七年八月に逝去するが、ここに紹介するのは哲学者・市川浩との対談での三木の発言であり、三木自身が校正したものとしては最後のものである。

「狩猟採集から農耕牧畜の世界へ転換をとげたところから問題が始まるのでしょうか。前者はただ旬のものを食べる世界ですね。ところが後者は秋の収穫で一年間食いつなぐ……」。「問題は「たまり」ですね。このたまりの形態がまったくありえないのが植物で、たまりを始めたのが動物の出発点の腔腸動物ヒドラです。湾入を造って、そこにしっかりとめ込む」。「植物では完全に流れている。一瞬の休みもなく。いわゆる根粒大根とかじゃが芋とか、あれは植物のなかでもかなりデカダンになったのでしょうか」。

「ある意味ではたまりというのは、動物の根源的な業じゃないか」。「たまりとしていち

ばん最初にできてきたのがさきに述べたヒドラの腔腸ですが、これが体制の進化とともに肝臓になっていく……今度は肝臓よりももっと手前にたまりができた、それが胃袋なんです。「この胃袋が食糧貯蔵の原型というものです。ところが胃袋よりももっと手前にほほ袋というのができる。これが咀嚼（そしゃく）する哺乳動物です。そしてこうしたたまりの場が、ほほ袋よりも一つ先に出たのが、いいかえれば、口より外に出てしまったのがほかならぬ私たち人間です。農耕民族の食糧貯蔵庫です。そしてその行き着く果てに日銀の地下の倉庫があるのです」（『G-T E N』第二二号六〇～六一頁 一九八七 天理教表統領室教養問題事務局、同内容は『現代思想』一九九四年三月号に再録）。

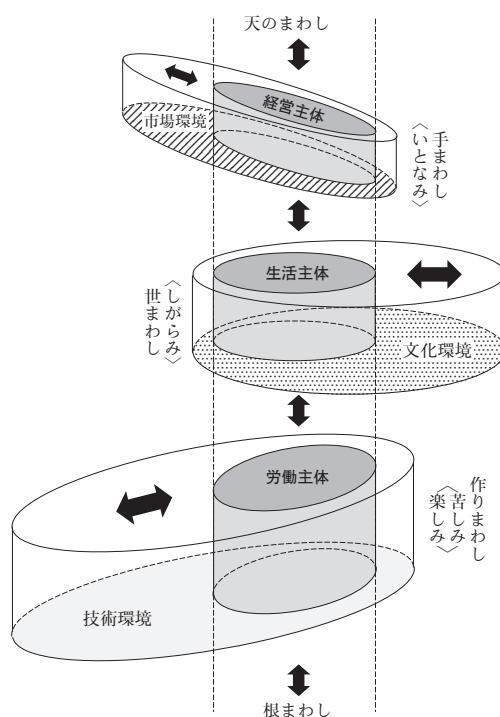
吉本隆明は、以上の三木の独創的な見方を次のように説明している。「動物が脊椎動物までに進化してゆくあいだに、長い年月をかけてじぶんの腸管の内部につぎつぎに溜まりの場をつくっていった。いちばん奥の方の溜まり場が肝臓で、つぎに胃袋から口腔（口のなか）までに及ぶようになった。そして奥の肝臓は消化され精製された血液のような養分の溜まり場だが、胃袋から口腔（口のなか）の溜まり場にかけてはだんだんと未消化な栄養物の溜まり場になっている。著者は初期条件を進化させて、大地を耕やし、播き育てた食用植物から収穫栄養物の実を貯蔵小屋に溜めておくことで、進化をじぶんのからだの外延にまで連続して拡げてゆくようになり、ここまできてただの腸腔からはじまった溜まり場の生成変化の過程がおわると述べている。この発想法をつくりあげた思考を、わたしはマルクスや折口信夫のほかに知らない。この透徹した認識が三木成夫の独創と特色だと思える。……生命体の発生から人間（ヒト）に進化するまでの過程が、内臓や神経や筋肉の発生と発達にそって透徹して把握され、しかも環境としての宇宙のリズムと生物体内のリズムとが照応し、呼応する関係にあることにまで認識の触手は及んでいる。人間（ヒト）を含めて生物体もまた自然の一部だということがここに明示されている」（三木『海・呼吸・古代形象』の解説二三〇～二三一頁 一九九二 うぶすな書院）。

この三木の動物における「たまり」の発生史的展開による生命史、人類史の見方は衝撃的である。三つの主体—環境系をつなぐ論理は、三木の言う宇宙と生きものたちの交響するリズムによる＜天のまわし—世まわし—手まわし—作りまわし—食べまわし—実＝身のまわし—根まわし＞の生きまわしの大義・広義・狭義の農法である。三つの主体—環境系をくくる論理は、まわし＜まわす⇔まわされる＞である。私がこれまで紹介してきた熊代幸雄の「総合的生命主義」、今西自然学による渡辺兵力の農学論、川喜田二郎の「生命多重論」は、宇宙と生きものたちの交響するリズム論なのではなかろうか。

（本研究は、日本学術振興会・基盤研究（C）一般の令和二～四年度（課題番号 20K06288）の研究成果の一部です。文献調査・閲覧に関しては、大阪経済大学図書館閲覧係、同日本経済史研究所事務室、京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻司書室の皆さまにお世話になりました。遅れた原稿の修正や面倒な作図に関しては、印刷の協友社様には的確、迅速に対応して頂きました。ともに記して感謝します。）

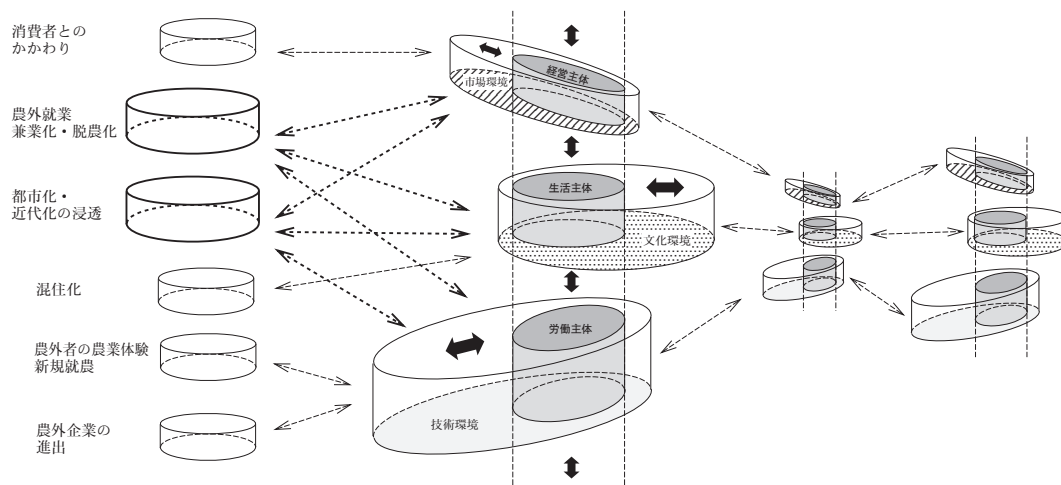
第1図 3つの主体—環境系の協働で創発する農法の構造

(徳永作図)



第2図 在地=場における各主体—環境系どうしの相互扶助=協働と農外要因とのかかわり

(徳永作図)

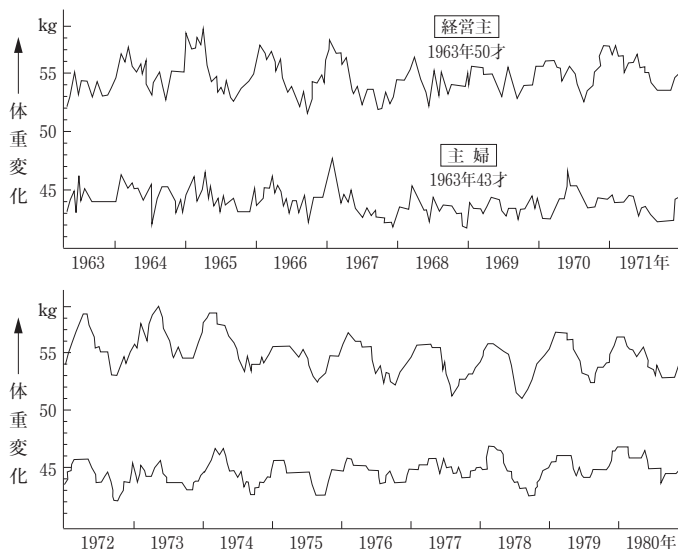


第7図 森川辰夫による農家生活時間構成類型の重層性とそれに対応する農家生活リズム

大 類 型		中類型(季節型)	小 類 型(月—旬—週)	単位類型数 (日数)	単位類型	
年間生活時間構成		農繁閑期型	就労類型(睡眠+労働+その他)			
			時間	日		
(年間睡眠時刻の図) 年代リズムへ	冬	{	(秋冬型)	休 養 型 (10+ 4+10)	10	労働 その他の時間 作業リズム ↓ 農作業リズム ↓ 1日労働リズム ↓ 1日リズム
			農閑期型	農繁準備型 (9+ 8+ 7)	21	
				休 養 型 (10+ 5+ 9)	20	
	春	{	(春秋型)	農繁準備型 (8+ 9+ 7)	36	
			準農繁期型	均 衡 型 (8+ 8+ 8)	13	
	梅雨	{	(春夏型)	農繁準備型 (7+ 8+ 9)	14	
			農閑期型	過 労 型 (7+11+ 6)	18	
				農繁準備型 (7+ 8+ 9)	8	
	夏	{		過 労 型 (7+12+ 5)	21	
			(春夏型)	均 衡 型 (8+ 8+ 8)	10	
			準農閑期型 (準農繁期型)	疲労回復型 (7+ 6+11)	20	
野分	{	(春夏型)	均 衡 型 (8+ 8+ 8)	10		
		農閑期型	疲労回復型 (7+ 5+12)	11		
			休 養 型 (7+ 4+13)	20		
秋	{	(秋冬型)	均 衡 型 (8+ 8+ 8)	11		
		農閑期型	農繁準備型 (9+ 8+ 7)	16		
			重 労働型 (9+11+ 4)	24		
	{	(秋冬型)	疲労回復型 (9+ 8+ 7)	21		
		準農閑期型	休 養 型 (9+ 5+10)	10		
		準農繁期型	均 衡 型 (8+ 8+ 8)	20		
		疲労回復型 (9+ 8+ 7)	31			
		季節リズム	各作業期リズム(単位類型の組合せ)			
		体重変動パターン	農繁閑期作業時刻図			

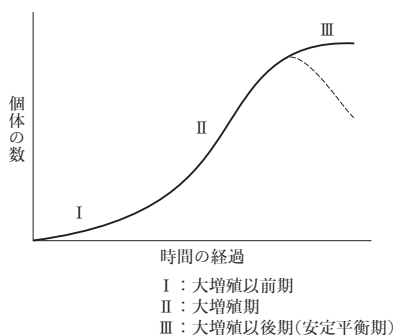
(注) 森川『農村生活の構造』68頁より。

第8図 森川辰夫による千葉県成田市・小規模稲作農家の経営主・主婦の体重変化 (1963～1980, 毎月3回測定)

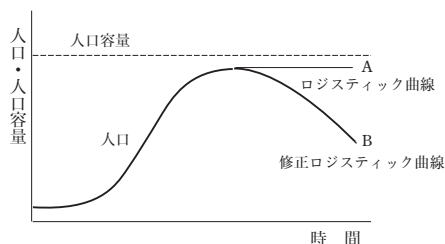


(注) 森川前掲書149頁より。

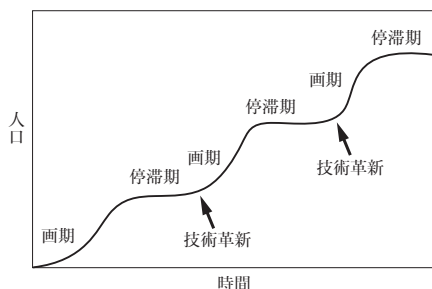
第9図 見田宗介による
ロジスティック曲線



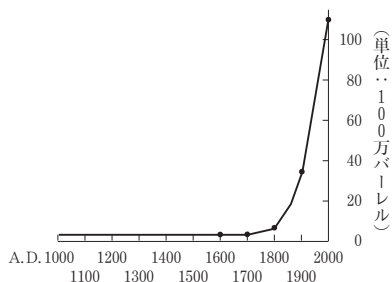
第10図 古田隆彦によるロジスティック曲線と
その修正



第11図 宮下直による文明の画期と
停滞のダイナミズムを表す模式図

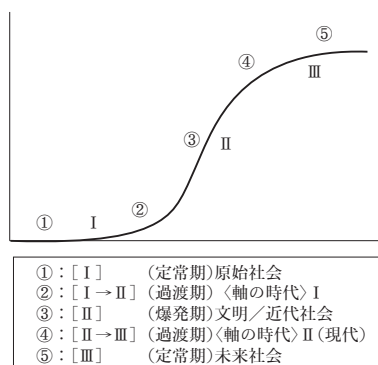


第13図 見田宗介による世界の
エネルギー消費量の変化



* 右目盛の単位は石油換算して1日あたり

第15図 見田宗介による
人間の歴史の3つの局面



第9図 注) 見田宗介『現代社会はどこに向かうか』8頁より。

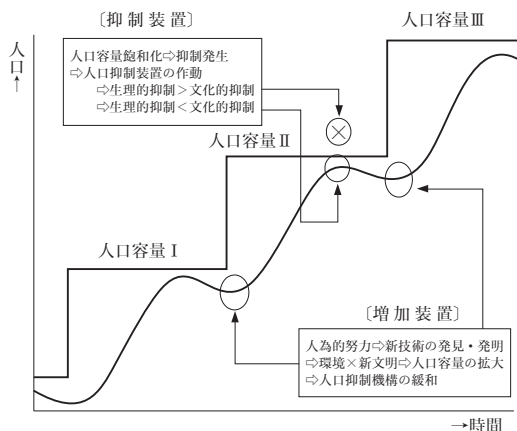
第10図 注) 古田隆彦『凝縮社会をどう生きるか』28頁より。

第11図 注) 宮下直他『農地・草地の歴史と未来』20頁より。

第12図 注) 古田隆彦『人口波動で未来を読む』8頁より。

第13～15図 注) 見田前掲書 6, 9, 10頁より。

第12図 古田隆彦による多段階人口波動曲線



第14図 見田宗介による世界人口の増加年率

